

鹿児島の植物 51 **サンゴ礁の島々****海辺の植物**

植物担当 寺田 仁志

サンゴ礁の島々の海辺は、黒と白の世界です。白はサンゴ、黒とは濃い緑のこと。南国の強い日差しを受け止めエネルギーを蓄えるよう葉緑体をいくつも重ねた植物が緑を重ね黒く見えるのです。

さて、地殻変動で陸に上がったサンゴ礁(隆起サンゴ礁)と新たに生まれたサンゴ礁の間

(礁湖)にはウミヒルモなどの海草が生えます。海草はウミガメやジュゴンなどの大型動物のえさとして重要です。



イソフサギ

隆起サンゴ礁の波打ち際にも植物は生えます。イソマツやウコンイソマツ、イソフサギ、モクビャッコウなどが生えます。通常は満潮時に潮



イソマツ

に浸る環境ですが、荒天時には激流となって波が押し寄せるところにしがみつこうにはええです。土もほとんどなく岩の割れ目に根を張って、海水からも水を吸収する仕組みを持っている特殊な植物たちです。植物体は抵抗が少なくなるよう10cm未満のものがほとんどです。



ハリツルマサキ

こんな厳しいところに生えるイソマツは絶滅危惧植物の1つですが、漢方薬として利用する目的等で盗掘がしばしば行われるため、地元では監視の目を光らせています。

波打ち際から少しずつ陸に近づくと次第に環境も和らぎます。荒天時に潮流が流れることもあるところではびっしりとコウライシバが生えるところがあります。

潮の飛沫は飛んでくることはあっても潮が流れ込むことがないところには、蔓状に枝を伸ばすテンノウメやハリツルマサキ、クロイゲ等の低木も生えます。こんな場所はまだ土も十分になく乾燥も著しいのですが、わずかにたまった土を利用してコウライシバが生えます。その中に宝石のような花を咲かせるオキナワチドリやナハエボシグサ、ハマボッスなどが混じり、春には幻想的なテッポウユリの大群落に変わることもあります。



オキナワチドリ

礁湖の陸側が砂丘地になっているところでは植物種が変わります。波打ち際からわずかに後退したところにツル植物の群落が形成され、グンバイヒルガオやハマアズキなどが生えます。ほとんど同位置にコオニシバやハマニガナ、ハマボウフウ等を含む群落ができます。波打ち際近くは風も強く砂が舞い上がって植物体の上に積もって埋まることもありますが、時間をかけて脱出する不思議な力を持っています。



アダン

砂の移動が止まったところにはびっしりとクロイワザサやツキイゲ、寄生植物のスナヅル等が生え、陸の濁水を濾過する機能もあります。

その陸側には葉にビロードのような毛を持つモンパノキや鮮やかな黄緑のクサトベラが低木林を形成します。さらにその陸側にはびっしりと濃い緑の葉を茂らすアダンが幹を縦横に伸ばし海風が入らないような群落をつくります。

このように海辺からの距離によって生える植物は変わってきます。